

總門谷R

阿黑篇

高橋克彦

總門谷 R

阿黑篇



高橋克彦

総門谷 R (阿黒篇)

定価一四〇〇円(本体一三五九円)

第一刷発行 一九九一年二月二十五日

著者 高橋克彦

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽二―一二―二

電話 東京(〇三)三九四五一―二二(大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛てにお願いいたします。

© KATSUHIKO TAKAHASHI 1991 Printed in Japan

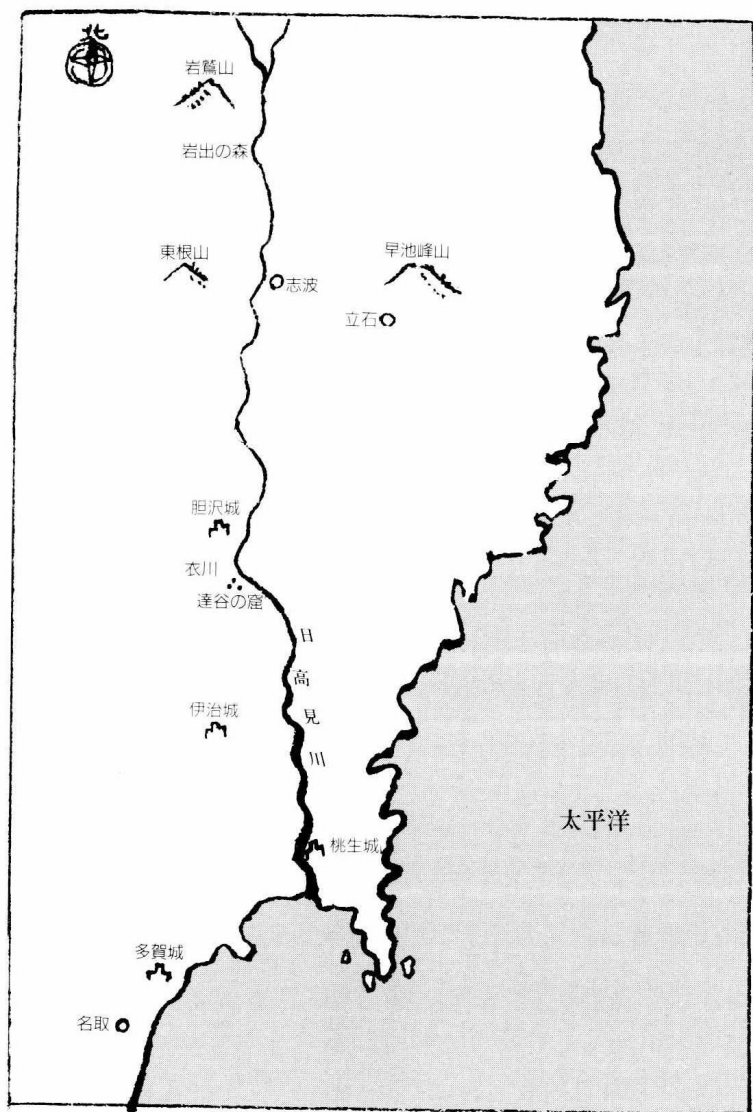
総門谷R(阿黒篇)——目次

阿黒屍魔戦の巻 7

陸奥屍魔戦の巻 158

早池峰屍魔戦の巻 287

あとがき 459



装幀 横尾忠則
本文イラスト 吉田光彦

総門谷R（阿黒篇）

阿黒屍魔戦の巻

1

宝亀六年十一月。西暦では七七五年のこと。厳冬の富士山麓に広がる樹海に蠢く幾十人かの人影が見られた。真夜中である。彼らは雪に腰まで埋もれながら、一言も言葉を発せず深い樹海の果てを目指していた。それにしても異様な集団だった。飛ぶ鳥さえも凍てつかせる冷気が渦巻いているというのに、集団の中心に位置する何人かは薄い法衣を身に纏っているだけだった。はだけた胸元にはしたたり落ちた汗が氷の粒となつてびっしりと張り付いている。額は白い布で覆つて、目玉だけをぎらつかせているが、それとて寒さ避けとは思えない。反対に分厚い防寒着で身を包み樹海に道を拓いている十幾人かの猛々しい男たちの中には、今にも凍え死にしような顔の者も見受けられる。

「見よ」

白い覆面の人間たちに囲まれるようにして歩いていた老人が、空を見上げて言った。長い銀髪に胸元まで垂れた髯、そのどちらにも凍りつき、遠目には老いた氷像とも見える。だが、声は凜と

して強靱であつた。

覆面の者どもは誘われて顔を上げた。葉もなく、白いサンゴにも似た樹々を透かして真蒼な夜空がどこまでも広がっている。触れると怪我でもしそうに尖つた光を放って、幾万もの星々が冬の天空を埋めていた。その中央を一筋の赤い光がゆっくりとよぎっている。

「神々どもの火車じゃ」

覆面の者たちに緊張が走つた。

「我らに気づいたわけではあるまい」

老人はそれでも不愉快そうに続けた。

「いづれ決着をつけねばならぬの」

御意、と何人かが頷いた。

赤い光はそのまま富士の山頂に消えた。

「風穴とやらは、まだか」

老人はひときわ図体の大きな男に訊ねた。

大きな男は覆面を脱いだ。剃髪である。もはや六十にも手が届こうと思える面相でありながら、分厚い体軀は太い筋肉に包まれている。口許に邪悪な笑みを浮かべながら、大男は前方に見える丘を指し示した。

「調べに間違いはなからうな」

頷きつつ老人は念を押した。

「ここは神々の領域じゃ、陽が昇る前に終えてしまわぬと少しうるさくなるぞ」

「なにとぞご安心あれ。役小角は必ずあの風穴に眠っておりまする」

大男は自信たつぷりに応じた。

「それにしても、我らがかほどに難儀をしてまで迎える価値のある男か？」

別の小男が鼻で嘲笑うように質した。

「たかだか巷の傀儡師であらう」

「あやつは式神を巧みに操る魔物ぞ」

大男はその相手を大声で威嚇した。が、真っ直ぐに睨み返す小男の青い二つの瞳には人を瞬時に寸断する刃の冷たさを感じ取れた。歳も若く、自分の半分にも満たぬほど痩せて非力な相手なのに……大男はふと氣後れを覚えた。それにはこちらがまだ新参者であるという意識も加わっている。

「力なき者は自ら滅びましょうぞ」

もう一人の男が覆面を取った。風穴が近いと聞いて顔を隠す必要がなくなったのだ。

「屍魔としてお役に立てるかどうかは、いづれ分かること。ここで我らが詮索すべき事柄ではあるまい。無駄な諍いは慎まれよ」

大男と小柄な男に較べて、その笑顔には冒しがたい知性と穏やかさがうかがえる。

「ようやく百五十年の身で、儼に慎めと？　いつからうぬはそれほど偉くなった」

「それこそ無駄口と言うもの」

老人が小柄な男を一喝した。

「役小角は儼が決めたことじゃ。こやつ言うように、役立たぬ死人であれば溶かす。それはう

ぬらにも変わらぬ運命と心得ておけ」

男たちは雪原にひれ伏した。

「まっこと報告通りに体が腐らずにおるものならば、今夜にでも蘇生が可能である。それをおつて同意したまで。それだけじゃ」

「小角は必ずやお望みに適う男でござる」

大男は額を雪に埋めながら力説した。

「拙僧と同様、朝廷に遺恨を持つ身で……」

「遺恨のみでは戦さに勝てぬわ」

老人は先を急げと顎で命じた。

辿り着いた風穴は真の闇だった。

松明を点すと、その炎の熱に、外気を遮断した風穴の温かさが加えられ、法衣の男たちの凍った体から激しい湯気が立ち昇った。急速に肌の氷粒が蒸気と化して行く。

「苦勞であつた。これより先は我々だけで行く。ここにて暫時休息いたしおれ」

大男は先導の男たちを勞い松明を手にした。

「修行場じやの」

老人は風穴の壁に刻まれた無数の仏を見渡した。孔雀明王を中心とする曼荼羅だった。

「どうやら神々より授けられた知恵じやな」

老人は呵々と嘲笑した。従う男たちも薄笑いを浮かべて曼荼羅を見渡した。

「役小角……案外役に立つ男かも知れぬぞ。この様子では神とも繋がりがありそうだ。しかも、見捨てられたとあつては神に恨みも……」

「さようにござる」

老人に大男は満足気に頷いた。

「案内せい。そちの言葉より、そやつの恨み言を儂が直接に質してみよう」

老人は長い裾を翻した。

狭い洞窟をしばらく進むと、やがて朽ちた板戸で先が塞がれた。板戸には憤怒の形相をした孔雀明王が一杯に描かれている。

「人の血で描いておるのか」

小柄な男は目敏く見てとった。

「小者は常に墓を飾りたがる」

言いながら小柄な男は板戸に掌を当てた。軽く押しただけで板戸は激しい音を立てて左右に割れた。板戸は五センチの厚みがあった。

大男はゾツとした。自分にも次第にその力が加わりつつあるが、まだまだここまでは無理だ。七百年という歳月の差であろう。

「死体はどこにある？」

板戸を踏み越えて入り込んだ小柄な男が、大男を怒鳴った。四角い洞窟には中央に護摩壇がしつらえられているだけで、柩らしきものはどこにも見当たらない。

「そんな馬鹿な……」

大男の額から大粒の汗が噴き出た。確かにこの穴の中に役小角が眠っているはずだ。

「上じや」

老人が呟いた。その声が洞窟に響く。

大男たちは天井を見上げた。

青銅で拵えた巨大な鳥籠のようなものが鉄の鎖で天井から吊り下げられている。その籠の中に瘦せた老人が胡座をかいていた。大男の話では、亡くなって五十年が経つというのに、役小角の死体にはまだ瑞々しさが見られた。もともと脂肪の少ない体に、この風穴の冷氣と、湿気を伝えぬ中空の籠が幸いしたのだ。

「手柄であつた」

死体を点検した老人は大男を褒めた。

「これなれば面倒はない。籠を下ろせ」

「やはり角があります」

噂に聞いていた額の角を認めて大男は唸った。角と言っても、小さな瘤のような突起でしかないが、異様な面体である。

「神の血が多少は混じっておるのだろう」

死体を籠から出させて護摩壇に据えた老人はこともなげに口にした。

「こんな年寄りが役に立つものかどうか」

小柄な男は近寄ってしげしげと死体を眺めた。瞑った臉のせいで死体には気が感じられない。

だが、足腰に衰えはなさそうだ。印^{いん}を結んだままの指にも強い意思が汲^くみ取れた。

「頑固^{がんこ}そうなじじいだぞ」

少し見直した顔で笑う。

「うぬらはさがって見ておれ」

老人が男たちに命じた。

心を鎮めると老人は死体の額に左の掌を触れた。角を押さえて顔を上向きにする。額の中央を起点にして向かって左耳の下、右耳の下、右の眉毛の中心、右耳の上、顎^{あご}の中央、左耳の上、そしてまた右の眉毛の中心に戻り、最後に起点である額の中央へと一筆書きの要領で六芒星^{ろくぼうせい}の形を指でなぞる。今度は六芒星の中心に当たる位置を見定める。役小角の場合は驚鼻^{おどばな}の頂点より少し上だ。老人はそこに右の人差し指を強く押し付けると呪文^{じゅもん}を唱えた。本当は呪文も必要はない。精神を一心に統一することのみが肝要である。呪文とは、それ以外に心を遊ばせぬために工夫された、弱き者の知恵でしかない。だが、老人といえども、このやり方であれば無駄な時間を費やさずに済んだ。

呪文を唱える声が高まるにつれ、死体を中心に青白い靄^{もや}がゆっくりと漂いはじめた。耳から、鼻から、口から、瞼^{ひだり}の隙間から、靄^{もや}は密やかに小角の肉体に忍び込む。驚愕を抑えて大男はその秘儀を見守った。見慣れているのか小柄な男は平静を保っている。

どこから沸いているのか、青白い靄^{もや}は果てなく生まれ、果てなく小角に浸透した。

不意に――

小角の瘦せた首の太い血管が脈打った。

さすがに老人も肩で息をしている。

呪文の聲がますます高まる。

靄は肉にも変わるのか、死体には明らかな変化が見られた。げっそりと干涸びていた頬が少しずつ少しずつ膨らんでいく。落ち窪んでいた臉が知らぬうちに飛び出ていた。

印を結んでいた指が小さく震えた。

大男はごくくと唾を呑み込んだ。

「来よ……来よ」

老人はそっと指を離して呼びかけた。

かあつ、といきなり小角は口を開けた。耳まで裂けるかの勢いだった。

辺りに漂っていた靄のすべてが、塊となって、その口に飛び込んでいった。小角の体はビクンと硬直した。やがて細かく前後左右に痙攣する。両の臉が開いた。小角の口から振り絞るような長い悲鳴が洩れた。耳を覆いたいほどの痛みをともなった悲鳴である。赤く濁っている目玉からどす黒い涙が溢れた。肉体のすべてが靄と入れ替わっているのだ。涙は滴って腐れた衣服を濡らした。

靄は古い内臓をも内部から押し出しはじめた。どろどろと小角は大きく開けたままの口から得体の知れない膿を延々と吐き出す。臭気が狭い洞窟に満ちた。

膿を吐きながら役小角は目覚めた。

目玉が右、左とゆっくり動いた。

そして……老人を真正面にとらえる。